

書評

大谷栄一（編著）

『ともに生きる仏教——お寺の社会活動最前線』

筑摩書房、2019年4月、新書判、254頁

趙 夢盈*

Mengying Zhao

1. 初めに

仏教は日本に伝来してから1400年に渡って、日本の隅々までに浸透していった。特に江戸時代の「寺請制度」の成立により、仏教は日本における日常の一部となった。しかしながら、今日になると、「寺檀関係」のもとに存在していた寺院の役所としての機能はすでに廃止され、残された仕事は葬式法要のみとなった。だが、費用が高額であることから、仏教葬式は長い間、社会から批判されている。特に近年では、葬式を寺院に頼まないことや、直葬・墓じまい^①の増加により、寺院の最後の仕事も喪失してしまう可能性が大きくなっている。

こういった背景のもとで、仏教と寺院の存在意義や、社会における位置について見なおすべきという声がある。その声に応えるように、自ら反省し、社会活動を地道に行う僧侶や仏教団体が出現しつつある。

本書は編者の大谷栄一をはじめ、8人の著者が「日本仏教＝葬式仏教」という常識を真正面から問い直し、私的領域と公的領域の区分・宗教と社会の関係を再考したものである。それにくわえて、共著者の8人中、大谷と猪瀬を除き、残りの6人はみな研究者でありながら、社会活動家でもあるため、当事者と研究者という2つの立場から、複数の活動と複雑な現場の様子を詳細に記録している。そのため、本書は、日本における仏教者による社会活動最前線の様子と活動する仏教者の思い考えを紹介するにあたって優れた一冊である。

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系 (yumenonakayue@gmail.com)

2. 本書の構成

本書は2部に分けることができる。

まず第1部は（はじめに、第1章）、編者である大谷栄一が日本仏教・寺院の現状と問題点を分析した上で、寺院・仏教者による社会活動の理由と意義から議論を始め、仏教教義、寺院の歴史伝統、法律に定められた寺院のポジションという3つの側面から、寺院・仏教者の社会活動を肯定的に紹介している。さらに複数の研究者による仏教の社会活動についての研究と活動のパターンを整理し、それぞれ説明する。最後に、仏教の公共性・公益性を踏まえ、「寺を開く」と「ケアと臨床」といった視点から本書の概要を述べている。

次いで、第2部は（第2章から第8章）、各著者によって、様々な仏教者による社会活動について書かれた内容となる。

第2章は大阪母子餓死事件を背景とする、子どもの貧困対策として発足した「おてらおやつクラブ」についての紹介である。第3章は仏教系アイドルを初めてプロデュースした龍岸寺に関する記述である。続いて第4章では知恩院が主導した「サラナ親子教室」の運営について書かれており、第5章では、ジェンダーの視点から広島県北仏婦ビハーラ活動の様子を記されている。そして第6章では、グリーフケアを行ってきた著者が、ケアおよび、グリーフケアの意義について説明されている。第7章は、浄土宗僧侶による「米一升運動」の活動報告である。最後の第8章は、大阪市内にある繁華街のすぐそばに位置する「アートのお寺」應典院の事例である。

3. 「ソーシャル・キャピタル」「ともいき」「開かれた寺」

ここでは、本書でよく使われている3つの言葉を取り上げ、その関連について議論していきたい。

まずは「ソーシャル・キャピタル」である。櫻井（2015）によると、ソーシャル・キャピタルとは、社会資本もしくは社会関係資本と訳され、社会や他者への信頼、互惠性の規範、ネットワークの総体を示す概念である。日本における仏教寺院は檀家制度と世襲制といった特徴によってソーシャル・

キャピタルの醸成組織の1つとして捉えることも可能である。第2章の「おてらおやつクラブ」や第7章の「おうみ米一升運動」では、寺院とNPOの連携により、檀家たちからもらった食料品などを、必要としている人に届けるという活動から、ソーシャル・キャピタルがいかに関わっているかを明らかにした。Paxton (1999) が述べていたように、ソーシャル・キャピタルには「信頼」と「人々の交流」という二つの構成要素がある。地域に長年存在し続ける寺院は、地域住民からの信頼をある程度有している上、人々（特に檀家たち）の交流に場所を提供している。そのために、もともとコンタクトを持っていない檀家、NPO、そして食料を必要とする人々が、寺院によって結ばれることとなる。つまり、既存の寺院と檀家のネットワークに新たなメンバーが加入したことにより、さらに大きなネットワークとなったのである。その上、新メンバーの加入は、ネットワークにとって、新機能を付与されることも意味する。

例えば、「おてらおやつクラブ」と「米一升運動」は、最初の出発点は平常時における生活困窮者への食糧援助だったが、活動に参加する寺院が新たなネットワークとなることで、非常時（災害時）の救援活動にも大きな役割を果たすことができている。このように寺院はソーシャル・キャピタルの醸成組織の1つとして地域社会の中に重要な存在であることが提示された。

しかし、一方ソーシャル・キャピタルにも負の効果があると指摘されている。Porters (1998) によると、ソーシャル・キャピタルには「他者の排除」「個人の自由の限定」など負の効果がある。これら負の効果を取り除こうと考える時に、次のキーワード「ともいき」を参照することができる。

齋藤 (2017:24) はともいきを以下のように説明している。「人は、自他の存在は全て「諸縁力」「本願増上縁」の所生、すなわち過去から未来へと進化を促し続ける生命力によってあらかし出されているのだと気付くことで、利己主義を克服する。そこから、自己のみならず共同体や自然環境までもが向上していく「共生浄土」のために、職務に精進し改善や研究を続ける」つまり、「ともいき」は時空を超え、生物種、コミュニティ、さらに文化、国家の間にある境界線を取り除き、時間に分断されることなく全ての生き物が「いのち」という名の下で、何らかの縁により、平等につながれ、ともにいることである。

その一方、ソーシャル・キャピタルの概念はある特定の「ソーシャル」と

いう時空の限界のもとに存在するため、前述した負の効果が発生する。そのために、ソーシャル・キャピタルを醸成するときにも、実践されるときにも、ともいきを前提として、念頭に置くと、負の効果の減少につながると考えられる。

例えば、日本の仏教寺院はソーシャル・キャピタルの醸成組織という機能を持つ反面、一寺院はほとんど自分の檀家と同じ宗派に属する寺院としか関係しない特徴もある。そのために、地域住民の大多数は檀家である時代に、寺院のソーシャル・キャピタル機能がよく発揮できるが、時代の変遷と人口の流出により檀家の減少が顕著になると、この小さなコミュニティはより閉鎖的になり、自分自身の運営を維持するために、檀家や僧侶の個人自由の侵害も出てくる⁽²⁾。

一方、本書の各事例のように、仏教者が限定されている「檀家と寺院」コミュニティの限界を超え、社会へ貢献するように活動することは、「檀家と寺院」という二元的なコミュニティを打開し、多元的な現代社会で自分自身の立ち位置について改めて考えることで出てきた答えである。つまり「ともいき」の覚醒によるソーシャル・キャピタルの負の効果への矯正と見なすことができよう。例えば、第3章では、聖なる領域の寺院が、アイドル文化を取り入れることにより、寺院と現代文化、僧侶と大学生の間にある境界線を取り除いたのである。

最後のキーワードは「開かれた寺」である。この言葉は統一された定義はないが、最近のメディアで頻出している。特に、山門を開いて、檀家でない人々の出入りを許し、寺庭でカフェを開催したりするような寺院を報道されるときによく使われている。しかし、評者はそのような寺院を「開かれた寺」と呼ぶことに疑問を持つ。

本書第8章に登場する應院の住職でもある、著者の秋田光彦は「寺を開く」ということは、市民と一緒に問題を発見し、協働による問題解決を指すという。つまり「開かれた寺」とは、ただ外にいる人を単純に寺院に迎え入れるだけでなく、自ら社会との境界線を取り除き、ともいきの考え方をもち、地域のソーシャル・キャピタルを作り出そうとする寺院のことであると考えられる。

4. おわりに

現在、日本政府の財政赤字が年々拡大しており、政府だけが福祉事業の担い手となることは非常に無理があることは自明だろう。その一方、信仰の危機から運営問題を抱える仏教寺院も少なくない。しかし、仏教寺院には福祉活動を行う場所、ネットワーク、ある程度の経営資源を有している。その上、日本の仏教寺院は戦前から福祉事業に携わる伝統もあった。

よって、宗教による福祉事業の分担は、政府の財政的負担の軽減や福祉事業の質を維持することにも望ましい効果が出ると考えられる。一方、宗教施設（ここでは仏教寺院）はともいきの概念のもとで、福祉事業を取り戻し、社会に貢献しようとするれば、宗教施設と宗教そのものの存続にはプラスの意味があると想定できる。そのために、本書はこれからの仏教の福祉活動に促進と指導の意義を有している。

最後に、少し批判的なコメントをしておく。まず、本書にあるそれぞれの活動の紹介が、行われる際にどのような困難と直面したか、そしてどのようにそれらを乗り越えたかについての記述は、ほとんどない。また、第2、第5章の執筆者以外の著者は全員男性であることから、宗教の社会貢献という研究分野、或いは、日本の仏教というコミュニティ内部はまだ女性の存在感が薄いという印象はぬぐえない。さらに、寺院の福祉活動を紹介するにあたって有意義な書物ではあるが、寺院が福祉活動する意義や「ともいき」の説明は少し力不足だろう。

とはいえ、本書のような、「社会貢献する宗教」についての研究は今日の日本社会と日本仏教の存続に極めて有意義であることは強調してもしきれない。

注

- (1) 「直葬」とは、遺体をいったん自宅に安置し、近親者だけでお通夜を行い、その後、遺体を直接火葬場に運び、近親者だけで見送るという葬送形式である。「墓じまい」とは、墓所や墓石を撤去・処分することであり、廃墓ともいう。
- (2) 例えば、寺院の跡継ぎの自由に職業を選択する自由への損害や、檀家からお布施と離檀料の強制などがある。

参考文献

- Paxton, P. 1999. Is Social Capital Declining in the United States?: A Multiple Indicator Assessment. *American Journal of Sociology* 105(1):88-127.
- Portes, A. 1998. Social Capital: Its Origins and Application in modern Sociology. *Annual Review of Sociology* 24:1-24.
- 稲場 圭信 2001『利他主義と宗教』東京：弘文堂。
- 上田 紀行 2004『がんばれ仏教！お寺ルネサンスの時代』東京：日本放送出版協会。
- 櫻井 義秀 2015「第1章 人口減少社会における心のあり方と宗教の役割」櫻井 義秀・川又俊則編『人口減社会と寺院』pp.15-40、京都：法蔵館。
- 齋藤 蒙光 2017「浄土宗学における「共生（ともいき・きょうせい）」」『共生文化研究第2号』2:23-49。